目　次

日本語版の発刊によせて

『園芸療法と高齢者』出版によせて

編集者、訳者について

はじめに

パラダイスガーデン：アルツハイマー病患者のための
モデルガーデンの設計 ---------- 1

高齢者の生活の質に寄与する住居の景観 ---------- 15

高齢者向け異世代交流プログラムにおける画期的な取り組み事例
：総合的なアプローチの中で園芸療法が担う役割 ---------- 25

介護型老人ホームにおける園芸療法 ---------- 35

老人長期ケア施設における園芸療法の実施 ---------- 57

失語症の人のための園芸療法プログラム ---------- 77

園芸療法を取り入れてストレスを軽減
－虚弱老人を介護する家族の場合 ---------- 87

長期ケア入所施設における園芸療法
－健康・加齢・施設内生活に関する研究からの応用 ---------- 99

園芸療法教育と高齢者 ---------- 117

異世代交流園芸プログラム参加の子供と高齢者の行動研究 ---------- 131

AHTA の高齢者向けプログラムに関する調査 ---------- 143

引用文献 ---------- 179

日本語版の発刊によせて

わが国の高齢者数は２千万人の大台を突破し、総人口に占める比率は 16.2 ％と国民のほぼ６人に１人が高齢者となっています（98 年９月、総務庁推計）。世界に目を向けると、現段階で高齢者比率はスウェーデン（17.4 ％）、イタリア（17.1 ％）に次いで第３位ですが、2005 年までにはトップになる見通しにあります。

国連は 91 年に採択した「高齢者のための国連原則」を促進するために、1999 年を高齢者の自立、参加、ケア、自己実現、尊厳を確立する「国際高齢者年」と定めています。

さて、介護保険制度のスタートに伴い、医療・福祉分野では「市場化」をキーワードとして、ベンチャー企業から大手異業種まで、様々な企業が「介護」という新サービスを競うことになり、介護サービスの担い手や質の多様化が加速されてきています。すなわち、介護サービスが質を問われ、選択される時代となり、より良質な、利用者のニーズを満たす介護サービスの提供が求められることとなります。

ところで、近年わが国の社会では、植物を育て園芸活動にいそしむガーデニングが国民的な関心事となっています。住宅供給産業においては、建築基準法の改正によりもたらされたゆとり部分を、ガーデニングができるスペースとして消費者に提供する動きも出ています。

このような高齢者を取り巻くわが国社会の状況の中で、すでにアメリカで普及定着している「園芸療法」をとりあげた本書のテーマは、それを媒介として異世代交流、生活の質に寄与する住居景観の形成、老人長期ケア施設での応用など、いずれも高齢者のための５つの原則を実現することに深く関わるものです。世界全体の高齢者人口は、95 年の 6.5 ％から 2050 年に 15.1 ％を占めると予測され、高齢社会は２１世紀には地球規模で解決していかなければならない課題となります。高齢は誰もが経験するものであり、介護する側から介護される側へ立場を替えるものでもあります。そのような意味から、生活や人生の質を高め、楽しく人々が交流できる社会を迎えるためにも、『園芸療法と高齢者』は、あらゆる世代の人々に読んでいただきたい一冊です。

日本語版の出版にあたり、翻訳・監修をしていただいたグロッセ世津子さん、医学用語の監修をお引き受けいただいた広島国際大学医療福祉学部教授の吉長元孝さんに心から感謝の気持ちを表する次第です。

版権使用許可をいただいたハワースプレス社および日本語版出版をご提案下さったアメリカ園芸療法協会に感謝申し上げます。

１９９８年

財団法人　日本緑化センター
会　長　　伊藤　助成

『園芸療法と高齢者』出版によせて

「幸せな高齢化を実現しようと取り組んでいる人にとって必読の書といえるものだ。人と植物との関わりあいに関する研究の調査や実践に関する豊富な記事。・・・アメリカ人高齢者の健康と幸福の質を高めるうえで、園芸が果たす役割をきちんと見据えた、時宜を得た良書である。高齢者のクオリティ・オブ・ライフ（QOL)の向上に尽力している専門家の方々に是非とも読んでいただきたい。
『園芸療法と高齢者』は、晩年の生活のなかに園芸を通じた選択肢を広げる可能性を示唆している」ジョエル・フレージャー Joel Flager（MFS、HTR)：ラトガーズ大学クック・カレッジ助教授、郡農事顧問。

『園芸療法と高齢者』は、国際的に活躍する専門家18名が、園芸療法、その他療法、老年学、医学、建築の専門知識を発揮して執筆した10の報告から構成されている。・・・活動実例集ではない（もちろん、活動例も幾つか紹介されているが）。プログラムづくりの本だ。プログラムづくり以前に企画や運営上の支援の獲得を力説する。新たにプログラムを始めるにしても、患者の目標に合わせた活動を既存プログラムに取り入れるにしても、いずれにしても園芸を療法として活用し取り込んでいくための、「ノウハウ」がここにある。アルツハイマー病患者、短期あるいは長期の老人介護や共同治療を受ける患者、失語症患者を対象とするプログラム、そして異世代交流プログラムが注目される。また、介護者ストレスの軽減、高齢者用住宅で認められた対人間の社会文化的な影響についての議論は、療法士のニーズを見据えつつ全体を仕上げる展開だ。我々の社会は着実に高齢化が進んでいる。また、園芸は成人のレジャー活動として圧倒的な人気を誇っている。こうした現状を踏まえると、我々の職業にとってタイムリーな一冊が新たに加わったといえる。・・・読者が引き続き研究できるように、本書の最後にはアメリカ全土で展開されているプログラムの注釈説明のほか、参考文献すべてが掲載されている。現場の療法士や施設の管理者側が、園芸を療法として活用する、プログラムを開発する上で役立つ一冊と言えよう」
ダグラス L.エアハート Douglas L. Airhart(PhD、HTM) ： テネシー工科大学農業学部教授、アメリカ園芸療法協会元会長。

「昨今の研究と実践的な取り組みとを結びつけた、簡潔でありながら総合的な一冊。高齢者対象のプログラムづくりには『是非とも持っていたい』本である。」
エリザベス K.ブリット Elizabeth K. Britt (MA、BS、HTR)：デュページ・カレッジ（グレン・エライン、イリノイ州）園芸担当マネージャー。

「高齢のガーデナーを対象とした研究結果、理論、実践例、園芸活動を浮き彫りにした研究報告が収められた、傑出の書といえるものだ」
リチャード A.マットソン Richard A. Mattson (PhD)：カンザス州立大学園芸療法教授。

「 高齢者のための園芸活用に関心がある人にとって、価値あるガイドブック。・・・幅広い視点から、高齢者特有のニーズに合わせた庭園の設計方法、園芸療法プログラムを高齢者専門施設に取り入れる方法、異世代交流活動の重要性などについて丁寧に掘り下げている。・・・一般読者の手ほどきとなる良書でもあり、園芸療法の書籍にまた重要な一冊が加わったと言える」
チャールズ A.ルイス Charles A.Lewis (MS)：園芸家（アルバカーキ、ニューメキシコ州）。

編集者について

スザンヌ E.ウェルズ Suzanne E. Wells,MSは、米国環境保護庁環境科学指導官（Supervisory Enviromental Scientist）である。ガーデン・リソース・オブ・ワシントン（Garden Resource of Washington：GRW）の理事長を務めた経験の持ち主。GRWは非営利機関で、食物を栽培する、近隣の美化に携わる、環境の管理に責任を持つことを通じてコロンビア特別区住民の相互扶助の促進を行う。コミュニティ・ガーデンや緑地を整備し、維持することによって、住民は自分たちのコミュニティにおける生活の質（QOL)全体を高めることができる。ウェルズ女史は園芸療法友の会リーダー会員として、園芸療法に関する研究、教育、情報の普及を支援している。

訳者について

グロッセ世津子女史は、わが国の園芸療法研究家の一人である。立教大学仏文科を卒業後、フランスのブザンソン大学へ留学。ベルギーでステュワーデス、通訳等に従事、1986年に帰国。現在、㈲みどりのゆび、取締役企画部長。ペイザジストである夫グロッセ・リュック氏のパートナーを努めながら、欧米の緑化、環境、園芸、造園などに関する情報収集・提供を主業務とする。日本における園芸療法の普及を目指し、全国各地での講演・執筆活動のほかに、園芸療法ネットワークを主宰。岩手県東和町と埼玉県川口市で、実践活動を行っている。

（財）日本緑化センターが最初に実施した「ホーティカルチュラル・セラピー現状調査」から「園芸療法実践のためのガイド」の一連の報告書の作成、1995～97年の海外園芸セラピー研究ツアーのコーディネーターも努めた。著書には『園芸療法』（編著）、『園芸療法のすすめ』（共著）がある。